

リトミックにおける身体運動の意義 (4)
— ジョルジュ・エベールに関する記述を手がかりに —
A Study on the Significance of Physical Exercise in Dalcroze
Eurhythmics (4)
: Focusing on the Description about Georges Hébert

入江眞理

はじめに

I. 自然的方法 (méthode naturelle)

II. リトミック

III. J=ダルクローズの体操観

IV. 考察

おわりに

はじめに

エミール・ジャック＝ダルクローズ(Jaques-Dalcroze, Emile 1865-1950以下J=ダルクローズと表記)は、20世紀初頭、音楽を理解し表現するために音楽と動きを融合するリトミックを創案した。当初、リトミックの目的が音楽的能力の涵養であったにも関わらず、「体操改革運動に音楽的発想から大きな成果を加えた¹⁾」、「リズムと動きという側面から、新しい体操領域を開拓した²⁾」、などの指摘があり、体育の原理による身体の教育として大きな役割を果たしたと捉えられている³⁾。また、近代体育の流れを形成したスウェーデン体操⁴⁾とリトミックの身体運動の原理には、共通点が見いだされており、J=ダルクローズがリ

トミックを構想した背景には、当時の体操の普及があったことが確かめられている⁵⁾。そのうえで、J=ダルクローズが身体運動を生理学的、運動学的に分析しつつも、実践と研究を経て、リトミックを「体操」とは差異を認め分けていく過程が明らかになった⁶⁾(入江 2016)。J=ダルクローズは体操について、「体の機能を十分に作用させる⁷⁾」、「特定のテストに際し、身体がその最大の成果をあげることが可能にする⁸⁾」、とその価値を認めつつ、その目的は筋肉の訓練にとどまるものと認識し、体操とリトミックを区別したのである。一方で、ジョルジュ・エベール (Hébert, Georges 1875-1957) の体操については、「動きに対する欲求は、秩序や拍子とは別のものに

1) 今村嘉雄編、『新修体育大辞典』、不昧堂出版、1976年、975ページ。

2) 梅根悟監修、成田十次郎、『世界教育史大系31 体育史』、講談社、1975年、237ページ。

3) この今村、成田による指摘の他、大谷(1960)、岸野(1987)、板垣(1990)らも同様の指摘をしている。

4) P.H.リング(Pher Henrik Ling 1776-1839)によって体系化された体操。スウェーデン体操は、教育体操、軍隊体操、医療体操、美的体操の4領域で構成されている。

5) 入江眞理、「リトミックにおける身体運動の意義

に関する一考察—スウェーデン体操との比較を視点として—」、『ダルクローズ音楽教育研究』通巻第41号、日本ダルクローズ音楽教育学会、2016年、50～62ページ。

6) J=ダルクローズは、リトミックにおける身体運動を、「リトミックと呼ばれる体操の訓練」(des exercices de gymnastique dite rythmique)、「リトミック体操」(gymnastique rythmique)から、「特別な体操」(gymnastique spéciale)、「リトミック」(Rythmique)へと表現を変え、次第に固有の意味を持たせていく過程が確かめられている。

結びついており（エベール中尉はこのことをしっかりと理解していた⁹⁾）、と肯定的に記している。J=ダルクローズはエベールの体操のどのような点に多くの他の体操と違いを見だし、評価をしたのだろうか。

そこで、本論は、リトミックを身体運動という側面から捉え、J=ダルクローズ、およびエベールの教育の理念と内容を明らかにし、J=ダルクローズの体操観を改めて把握する。そのうえで、J=ダルクローズのエベールに関する記述を検討しながら、エベールと多くの体操とを区別した根拠を考察することを目的とする。

研究の方法としては、エベールについては、主要な著作である『体育、または自然的方法による完全な訓練¹⁰⁾』、『体育の実践のための手引き¹¹⁾』を資料として用い、「自然的方法」の原理と方法を明らかにする。J=ダルクローズについては、『リトミック・芸術と教育¹²⁾』、『リズムと音楽と教育¹³⁾』、『音楽と人間¹⁴⁾』および『リズム運動¹⁵⁾』を資料として用い、リトミックの原理を明確にしたうえで、J=ダルクローズの体操観に基づいて、エベールに関する記述を検討する。

先行研究としては、清水（1986）がエベールの方法を詳説し、フランスの近代体育史における位置づけを明らかにしている。しかしながら、近代体育史においては、スウェーデン体操からドイツ体操の系譜、あるいは、体操改革運動を中心に語られるものが多く、フランスの体育、およびエベールについての言及は限られている¹⁶⁾。リトミック研究においては、体操領域を視野に入れた研究は管見の

限り見当たらない。したがって、J=ダルクローズが肯定的に言及したエベールの体操について検討する本研究によって、J=ダルクローズの動きと結びついたリズム観が明らかになり、リトミックの身体運動の意義に新しい側面が確かめられるものと考えている。

I. 自然的方法 (méthode naturelle)

1. ジョルジュ・エベールとその背景

フランスにおいては、「近代体育の形成がドイツ、スウェーデンに比しておくれ、ナポレオン体制の崩壊後の“制限選挙王政”の時代(1815-48)においてようやく開始された¹⁷⁾」とされる。その時代の指導者の一人がアモロス (Amoros, Francisco 1770-1848) であった。アモロスの体育とは、ペスタロッチの方法を基礎にした「合理的、かつ道徳的な体育、すなわち『道徳的・体育的・身体教育 (エデュカシオン・フィジーク・ジムナシティーク・エ・モラル) を教えること』¹⁸⁾」であった。実験校におけるアモロスの体育では、①生徒たちが互いにはげましあい、協力しあい、助け合いながら秩序正しく練習することで、運動の練習を通して自己への確信も現れたこと、②フランスの産業を支えていく貧しい労働者の育成に有効であったこと、がその成果として認められた (梅根 1975)。このように、アモロスの体育は、理念においては慈善と公益を目的とするものであったが、社会的・政治的な背景から市民の体育は十分な成果があげられず、その方法は軍隊の中に残ったのである。つまり、「教育的ジムナスティックは制度化され、その担うべき身体価値は国家の有用性

7) J=ダルクローズ、板野平(訳)、『リトミック・芸術と教育』、全音楽譜出版、1986年、3ページ。

8) J=ダルクローズ、板野(訳)、『芸術と教育』、3ページ。

9) J=ダルクローズ、山本昌男(訳)、『リズムと音楽と教育』、開成出版、2003年、228ページ。

10) Hébert, Georges, *L'Éducation physique ou l'entraînement complet par la Méthode Naturelle. Historique documentaire*, 12es., Edition, Paris, Vuibert, 1947,

11) Hébert, Georges, *Guide pratique d'éducation physique*, 2.ed., Vuibert, 1916, および英訳書, Georges Hébert, Translated by Philippe Til,

The Natural Method, Createspace Independent Publishing Platform U.S.A. n.p. n.d.

12) J=ダルクローズ、板野(訳)、『芸術と教育』

13) J=ダルクローズ、山本(訳)、『リズム』

14) J=ダルクローズ、河口道朗(訳)、『音楽と人間』、開成出版、2011年

15) J=ダルクローズ、板野平(訳)、『リズム運動』、全音楽譜出版、1970年

16) オリンピックとの関わりの中で、創始者であるクーベルタン(Pierre de Frédy, baron de Coubertin 1863-1937)の名前が示されるが、フランスは体育の独自の方式をもたない、あるいは、近代体育の形成が遅れた、という指摘もある。

に集中し、学校ジムナスティックのイデオロギーを形成してく¹⁹⁾」のである。

アモロスの後、後継者ら²⁰⁾によってフランスの学校に教科体育が設立されるが、この学校体育も軍事力強化を目的とするものであった。しかし、マレー (Marey, Étienne Jules 1830-1904) とその弟子であるデムニー (Démeny, Georges 1850-1917) によって、「科学的な体育の建設²¹⁾」を趣旨とするフランスに初めての民間体育研究団体が設立されるなど、次第に軍事的な教練に批判的な動きがみられるようになる。デムニーの体操の特徴は、大谷 (1960) の記述を基にすれば次のようになる。①自然的、生理的法則に基づく、②静的な姿勢より連続的に行われる運動を重視する、③曲線状、螺旋状、および円形に動作させる方法を用いる、④停止した姿勢、運動を分解することより動作の結合に重点をおくこと、であった。しかし一方で、体育授業の現場では、スウェーデン体操の影響と思われる分析的運動も行われており (清水 1986)、デムニーはリングのシステムを否定しつつも、その体操は折衷主義的なものであったことが指摘されている (水野・木下・渡辺ほか 1961)。すなわち、デムニーの理念には連続的に行われる運動を重視する考えがあったに

もかかわらず、実践の方法として反映されるには至らず、それぞれの課題は別個に行われ、彼の理念と実践の間には隔たりがあった。そして、このデムニーの体操の全体の流れを円滑にすることに取り組んだのが、エベールであった。

エベールの経歴について、清水 (1986) によるもの²²⁾ を中心にまとめると次のようになる。(第1表)

28歳で体育指導者を志したエベールは、体育授業の方法に関する論文を書き、海軍省に認められた。海兵学校において実験が行われた結果、その成果が明らかになり、エベールによる体育指導が開始される。体育指導の内容は、次のようなものであった。「実戦に必要な訓練を行い、戦闘任務のための準備をする。分列行進の時間は削除し、全体の時間配分を考慮する。この特別な授業は『持続的で継続的な活動』という原理に従う²³⁾」。続くエベールの試みも顕著な効果をあげ、「人工的と思われる運動形態をつぎつぎに除外し、運動の施設や方法を自然に則したものの²⁴⁾」にしていったエベールの運動は認められるに至り、「自然的方法」(Méthode Naturelle) と呼ばれるようになった。

第1表 エベール略歴

1875	パリに生まれる。
1893	海軍幼年学校エコール・ナヴァルに入学、その後海軍士官養成コースに入る。
1903	体育指導者を志し、ロリアンの海軍体育専門学校に入学する。
1913	海軍を退役。体育研究を始める。
1914	第一次世界大戦に召集される。
—	文筆活動を続ける。
1943	「フランス体育連盟」を結成、会長に就任する。
1957	82歳で死去。

17) 水野忠文・木下秀明・渡辺融ほか、『体育史概説』、杏林書院、1961年、142ページ。

18) 梅根『体育史』、107ページ。

19) 清水、『フランス近代体育史序説』、不昧堂出版、1986年、136ページ。

20) フランスで初めて体育教員養成校の校長を務めたダルジー (D'Argy, C.H.)、学校体育教材の改善、

パリ市の教育改革に力を注いだレスネ(Laisné, N)である。

21) 清水『フランス近代体育史』、147ページ。

22) 同上、244ページ。

23) Hébert, *L'Éducation physique*, p.178.

24) 清水『フランス近代体育史』、246ページ。

2. 「自然的方法」について

(1) 原理

エベールは、著書、『実用的な体育のための手引き』について、「最終的な目標である完璧な身体の完成のために、最も効果的で迅速、かつ簡単な手段を整理し、より正確に実践的に体系化するために著した²⁵⁾」、と述べている。それは、「机上の理論ではなく、それとはまったく逆のすべての年齢、体格、職業、素性の被験者の5年間のフィールドでの指導と実践の結果を提供する²⁶⁾」、ものであった。その被験者は、「17歳から25歳の5000人（ロリアンのフェージリア海軍学校）、14歳から17歳の2000人（ブレスト海事学校）、スポーツで活躍する7歳から14歳の数百人²⁷⁾」を数え、したがって、「この方法は、そのメリットについて十分な証拠をもたらした²⁸⁾」、と方法の有効性を確信して述べている。エベールの方法とは、「決して新しい類のものではなく、例えば、体幹と四肢の屈曲と伸展、走ること、飛び降りること、泳ぐこと、といった何年もの間、多くの国で身体の文化として尊重されてきた運動と同一のもの、あるいはいくらか変化させたもの²⁹⁾」に過ぎないが、この方法においては、「ほとんどすべての種類の運動が補完され、経験される³⁰⁾」ものであった。さらに、「体育の発展は、特定の性質の運動を創り出すことや、その効果の正確な知識を意味するものではなく、実験によってそのうちのどれが最良の練習であるかを区別し、適切に組み合わせ、調和させるよりよい訓練の方法によって可能になる³¹⁾」、との考えを明らかにしている。

エベールの運動の方法は、以下の3つで構成されている。①必須部分：機能的基本と呼ばれる8つの運動、歩く、走る、跳ぶ、泳ぐ、登る、挙げる、投げる、自然な手段による防

衛、②付属または準備の部分：具体的な身体部分の利益のための運動、関節の正常な機能、吊り下げ、支え、均衡、片足跳び、跳躍、呼吸などによって促進された腕、脚、胴の単純な運動、および組み合わせの運動、③補足部分：ゲーム、あらゆる種類のスポーツ、そして最も一般的な手作業³²⁾、である。そして、これらのエベールの方法の特徴は次の通りである。①子どもにも大人にも、また、個人も集団の教育にも、すべてに適した方法である。なぜならば、特別な装置も道具も必要としないため、方法さえ知っていれば、学校、企業、軍隊など、どのような場所でも地域でも利用可能な手段として合理的に使用ができるからである³³⁾。②可能な限り、上半身は裸で行う。外気浴は回復力、活力、健全な体質のための強力な手段となるからである。寒さや悪天候に対する抵抗力を養うこともまた、体育の一部である³⁴⁾。③要約すれば、この方法は本質的に実用的である。つまり、「分析的に筋肉や器官を開発することは、実際的な用途、および使用において必要な協調を生み出さない³⁵⁾」という考えのうえに、「私たちの練習の方法は、非常に実用的³⁶⁾」であることを主張した。

また、エベールの方法を他と区別するのは次の点にあった。エベールの言葉を借りれば、「この方法の最もユニークで重要な側面の1つは、身体の適性と結果の観察を明らかにすること³⁷⁾」にあった。そのために、「実際に価値があるものが何であるかを知り、身体の力を明確に理解することができるように³⁸⁾」個人の記録カードを作成し、運動の主体者が、自分自身の能力を把握すると同時に、次の訓練を自ら選択することを重視したのである。

エベールは、「人間が完全に身体的な発達をし、最高レベルの生理学的完全性を達成する

25) Hébert, *Guide pratique*, p. V.

26) 同上

27) 同上

28) 同上, p. VI.

29) 同上

30) 同上

31) 同上

32) Hébert, *Guide pratique*, pp. VI-VII.

33) 同上, p. VIII.

34) 同上

35) 同上, p. VII.

36) 同上, p. VIII.

37) 同上

38) 同上, p. IX.

には、本質的に有用な運動、つまり自然な移動の運動と実用的な防衛の運動で充分³⁹⁾」であると考え、「肉体的に完成された人間は、絶え間ない日常の活動の自然な結果⁴⁰⁾」であることを示した。エベールは、具体的に役に立つ身体の獲得、および体力の維持を目的とし、基本的で自然な運動を組み合わせる持続的に行う体育の方法を構築し、「自然的方法」と名づけたのである。

(2) 体操の方法

エベールの体操の定義、目的、および方法は、「実用的体育」として次のように示されている。①活動は自然の法則である、②身体的発達は、一般に、個人が住んでいる環境の条件、および必要性に適応する、③文明化された国では、社会的義務、慣習や偏見が人間を野外での自然な生活から遠ざけ、しばしば彼の活動を妨げることがある。完全な身体の発達は、特別な方法ではなく、自然な運動とそれを変化させた簡単な練習によって獲得できる、④現代の便利な生活は身体的怠惰を生じさせる。しかし、走る、歩く、跳ぶ、泳ぐ、登る、といった本質的に自然な活動と、それらを変化させた形態を含むゲームやスポーツによって完全な身体的発達はほぼ達成することができる、⑤社会的慣習、および義務を負う文明化された環境にいることを望むならば、a. 十分な時間を体の修練 (culture) のために捧げること、b. そのための時間を最適に管理して無駄にしないこと、が必要である、⑥体の修練は、連続的かつ進歩的な方法で行われた場合に「体育」とみなされる。そしてそれは、自然的方法によってのみ可能なものである、⑦身体への影響に関する知識に基づいて練習を選択し、それらを分類し調整することによって教育の方法が体系化される。人工的な動きによる練習は効果を上げることはできず、かえって悪化させる、⑧系統的教育の目的は、人体が到達し得る最大の可能性を創り出す方法を提言することであり、また単

純に強い存在になることを追求するものである。現実的な観点から見れば、より健康で、活気があり、疲労や病気に対する抵抗力を身につけるには、機能的、かつ自然な運動が必要である。その運動は、8つの異なる部門、歩く (行進)、走る、跳ぶ、泳ぐ、登る、挙げる、投げる、自然な防衛 (ボクシングやレスリング) で形成される。⁴¹⁾

このように、エベールは、最も基本のこれら8つの運動形態を組み合わせ、文明化されていない地域に住む人々の日常生活のために必要な運動を理想として、運動を体系化し、体育として実施したのである。また、このような運動の組み合わせは、波型授業として実施されていた。(清水1986)「波型授業によって、エベールは集団的活動の中に個人の行動の自由を取り入れることができたし、各集団の同質性を求めることもできた⁴²⁾」、のである。

II. リトミック

1. J=ダルクローズとその背景

J=ダルクローズがリトミックを体系化した20世紀初頭は、人為的、形式的な体操に対する批判とともにそれに代わる新しい体操が求められ、ドイツを中心にヨーロッパに体操改革運動が興隆していた。体操改革運動の主体は、形骸化し、パターン化した人間像にはめこむための体操とは正反対の人間の可能性を拡大しつつ追求していく体操の実現であったとされる (岸野 1987)。この体操改革運動においては、芸術の原理による新しい教育思潮を背景に、それぞれの特色ある教育理念を体操として体系化していた。このような時代に、J=ダルクローズは、音楽を理解し表現するために音楽と動きを融合するリトミックを創案した。リトミックが音楽教育であるにも関わらず、体育史上では、J=ダルクローズがリズムを重視する体操の中心人物と位置づけられていることは、前述のとおりである。

J=ダルクローズの経歴について、『リト

³⁹⁾ Hébert, *L'Éducation physique*, p.1.

⁴⁰⁾ 同上, p.3.

⁴¹⁾ Hébert, *Guide pratique*, pp.1-5.

⁴²⁾ 清水『フランス近代体育史』、250ページ。

ミック事典⁴³⁾』を中心に他の文献も参考にしながら整理して述べる。

J=ダルクローズは、1865年ウィーンでスイス人の両親のもとに生まれる。幼い頃からドイツ、フランスの文化と言葉に親しんだ。6歳でピアノを学び始める。10歳で家族とともにジュネーブに戻り、18歳でジュネーブ音楽院を卒業する。演劇を学んだ時期もあり、その経験は、彼の教育法に影響を与えた。1886年、フランスのアルジェ劇場の副指揮者となり、その地方独特の変則的なリズムを経験したことが後のリトミックの構想に反映された。リュシィ (Lussy, Mathis 1828-1910) から理論の基礎となる音楽のリズムについて学んだ。1892年、ジュネーブ音楽院で理論とソルフェージュの教授となった。伝統的なソルフェージュの指導方法に反発し、音楽を身振りによって表現させた。その教育の方法には、心理学者のクラパレド (Claparede, Edouard 1873-1940) から心理学的な裏付けを得ている。ドイツのヘレラウの学校からの招

きに応じる。ヘレラウにはヨーロッパの知識人に加え、様々な国の音楽家、舞踊家などが彼の教育方法を学ぶために訪れ、その教育方法は「リトミック」として世界的に認められた。1914年、第一次世界大戦が勃発し、ジュネーブに戻る。その後、1915年ジュネーブに「ジャック=ダルクローズ音楽院」(Institut Jaques-Dalcroze) を設立、リトミックの教育的な発展に力を注いだ。1920年には主著である『リズムと音楽と教育』が刊行される。同時に、ロンドン、パリ、ベルギー、イタリアなどで精力的にリトミックの講義と講演を重ねた。ロンドンを初め、パリ、ベルリン、ニューヨークでもリトミックの学校が設立され、ジュネーブの小学校では、準公式的に科目として採用された。また、シカゴ大学などから名誉博士号が与えられ、ジュネーブ市からは音楽賞が贈られるなど、数々の榮譽を手にすることとなる。1950年、ジュネーブで84歳の生涯を閉じた (第2表)。

第2表 J=ダルクローズの年表

1865	ウィーンに生まれる。
1871	ピアノを学び始める。
1875	ジュネーブに家族とともに引っ越す。
1885	ドリーブ、フォーレに音楽を師事、演劇をダルボーに学ぶ。
1886	フランスのアルジェ劇場の副指揮者となる。
1887	ウィーンの音楽学校に入学。ブルックナーに作曲法を学ぶ。
1890	パリに戻り、リュシィに音楽理論を学ぶ。
1892	ジュネーブ音楽院にて、理論とソルフェージュの教授に任命される。
1905	学校音楽会議においてリトミックを紹介する。
1911	ヘレラウの教育施設に招聘され応じる。リトミックが世界的に認められる。
1914	ジュネーブに戻る。
1915	ジュネーブにジャック=ダルクローズ音楽院が創設される。
1950	ジュネーブにて84歳で死去。

(出典：フランク・マルタン、チボル・デヌス、アルフレット・ベルヒトルドほか著、板野平訳、『作曲家・リトミック創設者 エミール・ジャック=ダルクローズ』、全音楽譜出版社、1977、筆者修正)

43) ラインハルト・リング、ブリギッテ・シュタイマン、河口道朗、河口眞朱美 (訳) 『リトミック事典』、開成出版、2006年

2. リトミックについて

(1) 原理

J=ダルクローズは、リズムは「すべての芸術の土台⁴⁴⁾」であり、音楽は「人間の感情の基盤である⁴⁵⁾」、と考えていた。したがって、音楽リズムは、「自然に生まれた動きとダイナミズムを音に移し変えたものに他ならず、情感を、これ以外にないという仕方では表している⁴⁶⁾」、と捉えていた。J=ダルクローズは、これらの認識のうえに、リトミックの基本原則を次のように明らかにした。

- 1) リズムとは動きである。
- 2) 動きは、本来身体的なものである。
- 3) すべての動きは、空間と時間を要する。
- 4) 身体的経験が音楽的意識をつくり上げる。
- 5) 身体的媒体が完成に達すると、知覚が鮮明になるという結果が生じる。
- 6) 時間の中での動きが完成に達すると、音楽的リズムについての意識が確立する。
- 7) 空間の中での動きが完成に達すると、身体造形的 (plastique) リズムについての意識が確立する。
- 8) 時間と空間の中で動きが完成に達するのは、リトミックと呼ぶ身体運動訓練によってのみ可能である。⁴⁷⁾

また、リズムの特徴について、J=ダルクローズは次のような考えを示している。①リズムの特徴は持続性と反復性にある、②リズムの基本をなしている2つの要素、時間と空間は互いに切り離すことはできない、③生命は、実際、それ自身ひとつのリズムであり、多様な生の持続的な連なりである、④リズムは生命の本質的な諸原理の総合性を確立す

る、⑤拍子は反省から立ち現われ、リズムは直観から出現する⁴⁸⁾。したがって、J=ダルクローズにとって、「大事なことは、リズムを作り上げている持続的な動きを拍節的に規制することが、この動きの本質や特質を失わないこと⁴⁹⁾」であった。

さらに、J=ダルクローズは教育の理念を、『リズムと音楽と教育』の序文 (1919) で次のように明らかにした。それは、「子どもたちが自分たちの人格性に目覚め、自分たちのもって生まれた気質を伸ばし、一人ひとりの命のリズムをあらゆる障害から解放すること⁵⁰⁾」、であった。第一次世界大戦を経験したJ=ダルクローズは、社会的再建の時代に必要とされるのは、「個人の再教育⁵¹⁾」であると考え、「生のリズムの自発的な表出を発達させること⁵²⁾」ことを目的として、身体運動を教育の方法に取り入れたのである。

(2) リトミックの方法

リトミックの方法には、<動き>の学習、<ソルフェージュ>の学習、ピアノでの<即興演奏>の3つの領域がある。その目的は次のとおりである。①<動き>の学習は、からだ全体と、身体的なリズム感覚とリズムの聴覚を目覚めさせる、②<ソルフェージュ>の学習は、音の高さの段階と相互関係(調性)の感覚とそれぞれの音色を識別する能力を目覚めさせる、③ピアノでの<即興演奏>の学習は、触覚を援用してリトミックとソルフェージュの概念を結びつけ、音楽的思考を表現させることを学ばせる⁵³⁾。リトミックの身体運動は、<動き>の学習、なかでも身体的リズム感覚のための<リズム>学習である。リズム学習の原則は、次のように説明されている。①リズム運動とは本質的に身体経験の問題である、②音楽における三要素、音・リズム・

44) J=ダルクローズ、山本(訳)、『リズム』、48ページ。

45) J=ダルクローズ、板野(訳)、『芸術と教育』、6ページ。

46) J=ダルクローズ、山本(訳)、『リズム』、224ページ。

47) 同上、47ページ。

48) 同上、228～229ページ。

49) J=ダルクローズ、山本(訳)、『リズム』、227ページ。

50) 同上、viページ。

51) 同上、xiページ。

52) 同上、227ページ。

53) 同上、78ページ。

ダイナミックのうち、リズムとダイナミックは動きに関わるものであり、筋肉組織で経験される要素である、③テンポの変化、強弱の変化は身体で表現することができる、④音楽感覚の変化は、身体感覚の変化による、⑤リズムの的確な身体的実行力は、理論的に分析できる頭脳と実行できる身体との間の密接な連絡が確立されることで可能になる、⑥身体に自動性が保たれば、心は高度な事柄に対しても余裕をもち、自由さえもつことができる⁵⁴⁾。つまり、リトミックにおける身体運動の目的は、1つには「自動性を養い、筋肉組織の効果的な反応を確実にすること⁵⁵⁾」であり、また1つには「精神と身体の調和・一致を養うこと⁵⁶⁾」であった。「音楽には興奮

と抑制力があり、それらがわたしたちの活動にすべて影響し、感情的・精神的な活動の中心として、大切な精神力である⁵⁷⁾」、という認識に基づいて、リズムを根底にリトミックを体系化したのである。

Ⅲ. J=ダルクローズの体操観

J=ダルクローズの体操の方法、体操によって養われるもの、およびその限界についての見解を整理し、彼の体操観を考察する。(第3表)

第3表のとおり、J=ダルクローズは、多くの体操の方法は、集団で実施されるのに容易な号令によって行われるものが多く、時間と動きは均一で運動は断続的であり、弾力性に欠けるものと考えている。そのような体操は、

第3表 J=ダルクローズの体操についての見解

体操の方法についての見解	体操によって養われるもの	体操の限界
<ul style="list-style-type: none"> 健康目的であれ、スポーツが目的であれ、体育では、リズムの助けを借りずに身体を鍛えるのであり、生徒の一斉に行う動きをいちだんと容易に統制し監視できるようにと、ひとつの学級の身体の動きにほんのちよっぴりまぶす拍子や均斉…⁵⁸⁾。 たいいていの健康増進ジムやスポーツジムのシステムでは、ダイナミックはアゴークの協力は得ないまま進められる⁵⁹⁾。 そういったものが教える動きというのは、アゴーク(さまざまな時間の長さ)とダイナミックの多彩なニュアンスとは直接につながっていない⁶⁰⁾。 普通の体操の訓練では速さについてはごく限られた変化しか許さない⁶¹⁾。 	<ul style="list-style-type: none"> すべての体操のねらいや目的は、人体の特定部分の自然なままの機構を、訓練を重ねることによって目覚めさせ、発展させることにある。健康のための体操は体の機能を十分に作用させる。競技体操は特定のテストに際し、身体がその最大の成果をあげることができる⁶⁵⁾。 健康のための、また競技のための体操は、すっかり失ったと思われていたかなり多くの本来のリズムを身体に回復させる⁶⁶⁾。 	<ul style="list-style-type: none"> もし、この教育が本質的にスポーツ的なら、目的を踏み越し、感受性を欠いた世代をつくり出すだろう⁶⁷⁾。 体操競技者は、そろった動きの手を借りて芸術的な業や感情を表す業を成し遂げようと試みているのではない。彼らの唯一の目標は、鍛錬であり、健康法である。彼らは、動きをそれ自体のために開発しており…⁶⁸⁾。 教師が筋肉活動の準備時間の長短によって生じる違いに十分な影響を認めないので、動きは動きとしてだけで学習される⁶⁹⁾。 今日流行している多くの体操方式は…そのほとんどのメソッドには、訓練によってある限られた時間内での動きの正確さと規則正しさを確実にするという以外の目的があるとは思われない⁷⁰⁾。

<ul style="list-style-type: none"> ・今世紀の初め、体操といえ ば動的な衝動に拘引され、 伝統的な速度に影響され た、身体の断続的な運動に よって成り立っていた。弾 力性はほとんど追求され ず、直線的な固苦しい動き が急激に準備も脈略もなく 続き、反対に曲線は否定さ れ無視され、始めと終りは 混乱していた。各手足は特 定数の定位置に置かれるよ うに訓練され、その各部の 訓練はそれ自身完結してい た⁶²⁾。 ・古典的な体操で経験される のは運動の開始と終了の感 覚のみである⁶³⁾。 ・多くの体操教師や専門的な 運動選手…によって行われ る大部分の動きは用意され たものである⁶⁴⁾。 		<ul style="list-style-type: none"> ・一連のスポーツの実践は人体 の特定の動きのみを発達させ てしまう。その結果、ほとん どの運動家や体操家は、…時 間・空間における同時的な身体 展開の柔軟性を妨げるような、 特定数の自動的な運動を用い ることになる⁷¹⁾。 ・大部分の動きは…自発的では なく、偶然に生み出される生の 状態によるのではなく…彼ら から人間性をすっかり奪い… (自発性に関して) 芸術的な性 格をすべて取り去るのである⁷²⁾。 ・現在の体育における方式の誤 りは、その結果を学ばずに、ま たそれをアナクルーズと見做 すこともせず、さまざまな形 で肉体を震わせようとしてい ることにある…跳躍はメタク ルーズから切り離されるべき ではない⁷³⁾。
--	--	---

54) J=ダルクローズ、板野(訳)、『リズム運動』、5～6ページ。

55) 同上、7ページ。

56) 同上

57) 同上、8ページ。

58) J=ダルクローズ、山本(訳)、『リズム』、48ページ。

59) 同上、197ページ。

60) 同上、211ページ。

61) J=ダルクローズ、板野(訳)、『芸術と教育』、14ページ。

62) 同上、55ページ。

63) 同上、59ページ。

64) J=ダルクローズ、河口(訳)、『音楽と人間』、108ページ。

65) J=ダルクローズ、板野(訳)、『芸術と教育』、3ページ。

66) 同上、4ページ。

67) J=ダルクローズ、山本(訳)、『リズム』、128ページ。

68) 同上、158ページ。

69) 同上、197ページ。

70) J=ダルクローズ、板野(訳)、『芸術と教育』、12ページ。

71) 同上、14～15ページ。

72) J=ダルクローズ、河口(訳)、『音楽と人間』、108ページ。

73) 同上、144ページ。

本来の身体のリズムを回復させることはでき、基本的な体の機能の向上、および特定の機能の開発には寄与するが、感受性を養うには不十分であり、柔軟性に欠け、動きの目的は動きそのものの形成に限られる、と考えていた。

また、J=ダルクローズは、「アクションはすべて三部分を成しており、『前』、『間』、『後』という言葉によって特徴づけられる⁷⁴⁾」、と考えていたが、体育の方式では、メタクローズ⁷⁵⁾がアクションから切り離されていることを指摘している。J=ダルクローズは、「筋肉の収縮と弛緩の連続で生れる(ママ)それぞれのリズムは、隣りあった筋肉の集合の中で別のリズムを呼び起し、人体のあらゆる部分に広がる⁷⁶⁾」、という認識にあった。したがって、多くの体操は、「伝統的な運動に加えて、肉体の動きの出発点と到達点を繋ぎあわせる流れをもった一連の練習⁷⁷⁾」、によって補完されるべきと考えていたのである。

IV. 考察

前述のとおり、J=ダルクローズは多くの体操の方法について、一定の評価をしながらも限界があり、補われるべきものがあることを示していた。では、このような認識にありながら、エベールの方法に何を見だし、どのような点を評価したのだろうか。J=ダルクローズがエベールに関して言及した部分は以下のとおりである。

拍子の意図的な訓練は、規則正しさを確立してくれる。—この規則正しさがどうしても必要な場合もある。しかし、このように終始機械的に秩序を追い求めることは、生の自発的な発現という性格を不自然に歪める危険をはらんでいる。拍子は人間のた

めに創られたもので、人間にとっては道具となってくれるものだが、この道具は、往々にして、いつの間にか人間の主人になってしまい、彼の動きのディナミズムやアゴーギグに影響を及ぼし、その人間性を因襲的な仕掛けの奴隷にしてしまうのである。身体の動きに拍子をつけることは、ほとんどの体操の指導法を支配する特色のひとつであるが、多くの人体が、基本的な形と本来の衝動力を失ってしまっているので、人体を意志の力をかりて鍛え直す必要がある、という認識から生み出されたものなのである。しかし、健康な身体にあっては、動きに対する欲求は、秩序や拍子とは別のものに結びついており(エベール中尉はこのことをしっかりと理解していた)、それが導き出す表現は、人体の神経構造に左右される⁷⁸⁾。

このような記述から、J=ダルクローズは、エベールが多くの体操に見られるような運動の規則正しい秩序を追求したわけではない、と彼の方法を肯定的に捉えていたことがわかる。しかし一方で、エベールの方法の目的は、実際的で役に立つ体づくりであり、J=ダルクローズのリトミックの目的は、生のリズムの自発的な表出と精神と身体の調和・一致を養うことである。J=ダルクローズは、エベールとはその目指すものに違いを認めながらも、彼の運動の方法を客観的に分析し、運動が連続して行われ、流れを重視したものであることを評価したのである。つまり、J=ダルクローズは、エベールの「自然的方法」が、「身体運動の始めと終わりを統一する流れの、速度と強さのすべての段階に互る学習を含むということは必然⁷⁹⁾」という認識に沿う方法である、と考えていたといえる。

74) J=ダルクローズ、河口(訳)、『音楽と人間』、133ページ。

75) J=ダルクローズは、アナクルーズをアクションの準備、メタクローズをアクションの結果、と説明している。

76) J=ダルクローズ、河口(訳)、『音楽と人間』、142ページ。

77) J=ダルクローズ、河口(訳)、『音楽と人間』、142ページ。

78) J=ダルクローズ、山本(訳)、『リズム』、228ページ。

79) J=ダルクローズ、板野(訳)、『芸術と教育』、59ページ。

また、J=ダルクローズの「拍子や均整といったものは、リズム意識を目覚めさせるにも形成するのにも役立つことはできない…子どものリズム感を伸ばすには、規則正しい一斉の動きをさせるだけでは不十分である⁸⁰⁾」、という記述からは、J=ダルクローズが自然の動きを基本に置くエベールの運動に同質性を見出していたことが考えられる。

さらに、J=ダルクローズは、「原始的本能の開発、自己という存在を全面的に転倒させること、だけが、私たちの運動器官に、柔軟性、弾力、自由な弛緩という能力を与えてくれることができ、こういった能力のおかげで、私たちは感情面の姿をリズムで表現することができるのである⁸¹⁾」、と述べ、エベールの自然的方法をなぞらえた「原始的本能の開発」という表現を用いて、運動能力とその可能性について言及している。つまり、同じ時代にエベールの「自然的方法」が発展し身体教育として成果がある、と認められていたことは、J=ダルクローズにとっては、リトミックの教育方法の裏づけとなるものであったことが推察されるのである。すなわち、J=ダルクローズは、エベールによって、自らが目指す「自然なリズムの開発を基礎にした精神・身体的教育⁸²⁾」であるリトミックの身体運動の方法への確信を得て、彼を評価し、言及したのである。エベールの自然な動き、かつさまざまな速度と強さで行われる連続的な身体運動によって、J=ダルクローズは、リトミックのリズムの的確な身体的実行力を養うことができる、と考えたといえる。したがって、J=ダルクローズは、リズムの意識の形成に関しては、拍子によって秩序を追い求める体操の方法には限界を見いだしながらも、リズムの表現のためには運動能力の養成が欠かせないと認識し、リトミックの身体運動の方法を構築したことが確かめられたといえる。

おわりに

J=ダルクローズは音楽理解と表現のために、身体運動を音楽教育の方法に取り入れてリトミックを創案し、エベールは実際に役に立つ体の育成を目的として体育の方法を確立した。両者は同じ時代にあって、体操改革運動の大きなうねりの中で身体に関わる新しい教育を模索し、その方法の体系化を試みたのである。教育の目的は大きく異なるものの、J=ダルクローズが、エベールの運動の方法に同質性を見いだしていたことが確かめられた。今後は、「自然的方法」の具体的な運動の方法、およびエベールの女子体育の部門についても検討し、リトミックと比較することによって、より明確な両者の見解の異同を明らかにしたいと考えている。

80) J=ダルクローズ、山本(訳)、『リズム』、48ページ。

81) 同上、229ページ。

82) 同上、xiiページ。

